

授業科目名	対象学科・専攻	年次	期別
図画工作科指導法 Teaching Methods of Art and Handicrafts	児童教育学科 初等教育学専攻	1年次 2年次	後期 前期
科目	施行規則に定める科目区分又は事項等		
教科及び教科の指導法に関する科目	各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）		
講義・演習・実技・ 実習・実験	単位数	教員免許状取得 必修/選択必修	担当教員名
			縄田 也千
演習	2	必修	担当形態
			単独
全体目標及び概要			
図画工作科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された図画工作科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場면을想定した授業設計を身に付ける			
一般目標及び到達目標			
<p>(1) 図画工作科教材研究の目標及び内容</p> <p>一般目標 学習指導要領に示された図画工作科の目標や内容を理解する。</p> <p>到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 学習指導要領における図画工作科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。 2) 個別の学習内容について指導上の留意点を理解している。 3) 図画工作科の学習評価の考え方を理解している。 4) 図画工作科と背景となる学問領域との関係を理解し、教材研究に活用することができる。 <p>(2) 図画工作科教材研究の指導方法と授業方針</p> <p>一般目標 基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場면을想定した授業設計を行う方法を身に付ける。</p> <p>到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 子どもの認識・思考・学力等の実態を視野に入れた授業設計の重要性を理解している。 2) 図画工作科の特性に応じた教材の効果的な活用法を理解し授業設計に活用することができる。 3) 学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案を作成することができる。 4) 模擬授業に実施とその振り返りを通じて、授業改善の視点を身に付けている。 			

授業内容と進め方		
回数	授業内容	到達目標の番号
1	図画工作科教材研究とはどんな授業か、図画工作は何のためにあるのか、その目標や内容を理解する。	(1)－1) (2)－2)
2	低学年～中学年の教科書を見ながら、低学年～中学年の学習内容と特徴を学ぶ	(1)－1) (1)－2)
3	中学年～高学年の教科書を見ながら、中学年～高学年の学習内容と特徴を学ぶ	(1)－1) (1)－2)
4	造形遊びの意義とその内容について実践し、その意義を理解する。	(2)－1)
5	図画工作における絵画・デザイン・工芸・彫刻の各領域の内容を理解し、図画工作教材との関連を理解する。	(1)－4) (2)－1)
6	図画工作で使用する用具の特質と使い方を学ぶ①(クレヨン・コンテ・マーカー・色鉛筆で線遊びをする)	(1)－2) (2)－2)
7	図画工作で使用する用具の特質と使い方を学ぶ②(竹ペン・墨で観察画を描く「にぼし」)	(1)－2) (2)－2)
8	図画工作で使用する用具の特質と使い方を学ぶ③(透明水彩・ポスターカラーでバチックなどを体験する。)	(1)－2) (2)－2)
9	「コラージュ」(モダンテクニック)の歴史(美術史)を学び、授業を想定しながら雑誌、新聞紙をちぎり、「見立て遊び」を経験する。	(1)－4) (2)－2)
10	「コラージュ」のテクニックを学び、授業を想定しながら枯れ葉で「見立て遊び」を経験する。	(2)－2) (2)－3)
11	「コラージュ」のテクニックを学び、授業を想定しながら雑誌から「同じ色集め」を経験する。(色彩学)	(1)－2) (2)－3)
12	コラージュ作品を並べ、先生、児童になってお互いの作品の良いところを見つけて評価することができる。	(1)－3) (1)－4)
13	イメージトレーニングを通じて、発想力を身につける。	(2)－2) (2)－3)
14	好きな物や人形を好きな場所に配置し、デジカメで撮影し「物語」を作ることができる。	(2)－2) (2)－3)
15	9～14までの教材から好きなものを選んで指導案を書いてみる。(後期の模擬授業にむけて)	(2)－1) (2)－2) (2)－3)
成績評価方法	毎回の学習状況(意欲・感心・態度)30点 作品提出(完成度・技能・発想力)50点 レポート(理解度、思考力)20点	
テキストおよび参考文献	テキスト：文部科学省「小学校学習指導要領解説・図画工作編」 図画工作科教材研究 山口短期大学	
メッセージなど	図画工作は、子どもの「心」を育てる大切な科目で、アクティブラーニングそのもといえます。子どもの素直な表現を認め、評価できる教師を育成します。	